
わたししーらないと。

羽根羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

わたししーらないっ。

【Nコード】

N1756BA

【作者名】

羽根羅

【あらすじ】

でもきつとなんとかなるって信じてる。

「大統領、もう決着は見えたと」

「…そうだな」

『おい日本、そろそろ白旗をあげる』

「武士道とはッ！ 死ぬことと見つけたリイ！ お国のために！
神風隊、ケエツ！」

「馬鹿め…国民まで犠牲にするとは」

「このままでは日本が文字通りの焦土のみです。なんとかしないと」

「しかし肝心の日本があれではな」

「国民に罪はありません！」

「我々の預かる国民にも罪はない。戦争で疲弊しているのが日本だけだと思っな」

「…」

「残念だが助けてやれる余力が無い」

『最後通告だ。日本、降参しろー』

1 (後書き)

二番煎じとか、この部分はおかしいとか。

「総書記、あいつら決着がついたみたいですよ」
「マジか。日本の負けか」
「はい。軍は全滅。無力な国民しか残っておりません」
「マジかあ。息子がデズニールランド行きたがってんだけどなあ」
「総書記、お電話です」

「もしもし？ あのさー、聞いた？」

「あ、中国さんチース」

「あいつらが日本の領土とっちゃうとあ、ウチらが困るわけ」

「そうっすね。マジ困っちゃいますよ」

「日本は言わもすがな…いわがなずも？ なんだけどあ、お互い疲れてると思うわけ」

「そりゃあ、やっぱヤバいんじゃないっすか？」

「うん、だからあ、核ミサイル準備してた？」

「え？」

「核爆弾発射できるかって聞いたんだよハゲ」

「え？」

「えじゃねえよこのタコ。核弾頭こっそり用意しとけって言っただる海荒らされてえのか？ わざわざ荒らすような海ないけど」口すぞ

「サアーセンでした！ 急いで準備します」

「頼むからあ、ね」

「ハイ」

「どうでした？」

「準備してねえつてよ」

「おいおい……。大丈夫ですかね、間に合いそうですか？」

「時間的な問題はないけどお、やっぱり早い方が良いじゃん？」

「ですよー」

「仕事効率悪すぎ。あいつ何考えてんだろ。ウチ、うまくやるように説明してただけだ」

「世襲したからですかねー」

「いつの話だよ」

『もしもし中国さん』

『あ？ なんだ豚』

『どこに撃つんですか？』

『日本の領土取られたくねーって話したばっかだろうがよおこの夕』

『！』 『口されてーのか！』

「おこられた」

「でも目標地点だいたいわかりましたね。何発撃ちます?」

「手持ちの半分くらい?」

「日本にですか?」

「日本じゃねーって。話きーてたのかコラ」

「え? 日本じゃないんですか?」

「え? そういわれると不安になるんだけど…」

「確認してくださいよ」

「またおこられんのー? 嫌だよ」

「じゃあどこを狙わせれば良いんですかあ」

「あー、もー! 仕方ないなあ!」

『もしもし? 日本でいいんですか?』

『んなわけねーだろ豚野郎!』

「大統領、あの国またなんか実験って言って危ないことしてますよ」
「何をしてるか推測できるか？」
「恐らくあれは核弾頭だとの見方が強いですね。今正確な情報を調べているところです」
「迎撃の準備だけしておけ」
「わかりました」

「おい。なにやってんのか詳しく説明しろ」
「別になんでもないし」
「いいから説明しろ」
「なんでもないって」
「説明しろ」
「ほんとなんでもないんだって！」
「とにかく説明しろ」
「なんでそんなにしつこく聞くの！？ なんでもないって言うてるじゃん！」
「国民が不安がっている」
「情報規制もできねーのか遅れてんなー！」

「どうしようばれてる」

「マジですか」

「マジ」

「どこまでばれてるんですか？」

「まだ疑われてるレベルだと思う」

「じゃあまだ大丈夫ですね」

「そうかな？」

「そうですよ」

『この前はキレてごめん、あんまり疑うからいけないんだからね？』
『で？』

『絶対に迷惑はかけないから気にしないで』

『直ちに中止しろ』

『えっ、ちょ』

『繰り返す、直ちに中止しろ』

『おっ、お前からそんな命令される権限ないし！』

『各国迎撃体制が整っている…命令される権限？』

『衛星実験だから邪魔だけはすんなよ！』

『核ミサイルであることはわかっている』

『ちち違っし！ なんでだし！』

「どつしよづばれてる」

「どつしました？」

「だからばれてるんだって」

「マジですか」

「マジ」

「どこまでばれてるんですか」

「全部」

「全部!？」

『やばいよー中国さん、やばいってえ〜』

『はあ? やねよ』

『ほんとやばいんですってえ』

『いいからやれつつってんだろ? あとは何とかしてやっから』

『でも…』

『は? お前絶交な。もうウチにメールとかしてくんな。きても無視すつから』

『あつ、勘弁して下さいよ中国さんしか友達いないんですから!』

『しらね。切るわ、じゃーな』

『あつあつ、はい! わかりました!』

『あ? 脇? つーか別に良いって』

『やりますやります! やらせて下さい! 是非やらせて下さたあ
 『!』

『やらせるとかマジキモいんだけど』

「総書記？」

「発射ア！」

「そんないきなり」

「もっしー。撃ったった」

「確認した」

「キてるぜえー、キちまつたぜえ」

「迎撃ミサイルとは大西洋中でぶつかるようにしてある」

「はー！？ 急遽、太平洋側に向けてやったし！」

「あっ！？ ちよっ、ばっ！」

「ざまあ見る」

「だが残念だったな、ちゃんと部隊は展開してある」

「あ？ どのくらい？」

「どのくらいって…。：！？」

「全部撃ち落とせるかなあー？ それも太平洋上で？」

「クッ、別に国の反対端にいようが迎撃はできるー！」

「なんで太平洋側だけなの？」

「そんなまさかッ！」

「大統領…」

「これは。…しかたない。そもそもわたしの仕事ではないのだから
「ですがそうは言っても」

「よせ。全て撃ち落とせることを祈ろう」

「…はい」

「他の国家の対応はどうなっている？」

「芳しくありません」

「困ったな。我関せず、か。全く協力してくれる様子がない」

「今はどこも自国のことで精一杯でしょう」

「それもそうか…。よし、まず核施設の稼働をとめよう」

「どうやって？」

『調子に乗るなよサンピン』

『やめさせてから言ってみろ！ やれるもんならな！』

「そりゃあ…神風特攻隊で、だ」

「無理です！ 誰が好んで死に行きましょう！」

「じゃあどうする。こちらミサイルを撃つか？」

「」

「間に合わん。それに向こうも迎撃くらいできるはずだ」

『おい』

『あ？ なんだてめー』

『こちらは戦争が終わったばかりだ』

『さっき第二波行っただけど？』

『片付けが終わっていない。迎撃用の弾もあまりない』

『だから？ 待たないからな？』

『お前今どこにいの？』

『え？ 核施設の視察してる』

『何やってんだ今更か』

『うつせー』

『今からそちらに向かうから待っている』

10 (後書き)

なんか7なくなね？

「今からこつち来るって」

「誰がです？」

「大統領」

「え？ なんでですか？」

「しらねえけど」

「何しに来るんですか？」

「しらねえ」

「やめてくれって泣きつきに来るんですかね」

「そんな感じだったかなあ」

「違います？」

「いや、そうかも。だってそれくらいしかなくね？」

「ですよ。ないですよ」

『はい、もしもし』

『お前今どこ？』

『あ、中国さんチース。見てます？ 核の流星群』

『流星群？ じゃなくて今どこって聞いたたる答えるハゲ』

『？ 国内ですけど』

『たりめーだクスぶざけてんのか』

「大統領」

「どうした」

「どういふことですか、どちらへ向かわれていらっしやるのですか」

「日本だ…何がだ？」

「今からあちらへ向かうと聞こえました」

「そうか」

「どういふおつもりですか」

「そのままだ」

「駄目です」

「何故だ。お前が決めることではない」

「あなたがいなくなったらどうすればいいのですか」

「ふん」

「そんなの一兵士に任せれば済むことです。大統領自らが出られるなどありえません」

「兵士は散々失った」

「まだ残っているでしょう」

「彼等の戦争は終わったのだ。いや、終わってはいないが、安息を得ている」

「意味がわかりません。どこへ向かっているのですか」

「日本だと言っている。…生きて帰れたと安堵したものに再び死ぬというのか」

「独り身の者を選出すればよいでしょう」

「家族等の問題ではない。それに私が自分で行く決めたのだ」

「っ、何故ですか！」

「これは義務だ」

「何を…！」

「…ヨオ」

「ああ」

「顔を才合わせなるなア初めてだな」

「そうだな。初めまして」

「ハイ初めまして。どオぞ、上がれヨ戦友」

「お邪魔するよ、日本」

「大統領、嘘ついたのでか!? まだいるじゃないですか日本に
いっぱい! 兵士が!」

「彼等のほとんどが、もう命を脅かされることはない。そんな事、
あつてはならない」

「では後は任せた」

「ちよつと! 待つてください、じゃあ私が行きます」

「…意味がわからない」

「大統領よりマシです」

「いや、まず君は戦闘機を飛ばせるのか?」

「あ…。っ、でつでも、大統領一人が行ったところで」

「任せろ。この戦闘機は爆弾みたいなものだ」

「撃ち落とされたらどうするんですか!」

「そんなへまはしない、大丈夫だ」

「大統領!」

「時間がない。では、行ってくる」

『達者でなア』

『お前もな。これから頑張ってくれ。…それじゃあ』

「急いでここから離れてください」

「わかってるっつの。さっさと車回せ」

「はい」

「どんくらいだ？ あいつはどんくらいで着く？」

「もう少しかかるかと……」

「もっとスピードあげろ。当然だ、逃げ切れんだろーなあ。」

「そればかりは……判断できかねます」

「んだと　？　何い！？」

『待たせたな……！』

『てめえ……はえーんだよクソが！』

『弾薬庫は片付けておいたぞ、その次に施設だ！』

『核倉庫破壊たあいかれてやがる！　だが、んなにうまく行くと思

うなよー』

『死ねッ！』

『アッ？』

『クズめ。……。……神風ええー……特攻オオオッ！』

「迎撃失敗ッ！ 領空侵入しますッ！」

「馬鹿野郎、何がなんでも潰せ！」

「サー！」

「第四波射出確認、弾装填」

「ママ！ 迎撃ミサイル、これで最後です！」

「なんですって！？」

「撃ち落とせ！ 攻撃用でかまわねえ！」

「無茶です！ マニュアルないんですよ！？」

「オートマだろうが関係ねえ用意しろッ！」

「運転に時間がかかります！」

「上からの指示はどうなってる！」

「駄目です！ 奴ら第五波の準備をしています！」

「向こうの部隊はどうなっている！？」

「混線で把握できません！」

「指示を上げー！」

「もう無理です！」

「馬鹿者！ 弱音を吐くなア！」

「着弾確認！ 司令塔がやられましたッ！」

「ネットワーク壊滅！ どこもつながりませんッ、孤立しました！」

「駄目だッ、ここにも来る　！」

『ウチ
WWW中国
WWW漁夫の利
した
WWW漁夫の
WWW漁夫の利
WWWヤバイ
WWWウケる
WWWウマ
すぎ
ワロタ
WWW』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1756ba/>

わたししーらないと。

2012年1月15日02時49分発行